

プロメテウス

長尾久敬

自己の立論に到るまでの模索の過程が註として或は前提として提示されねばならない。圖式化にまで到達したのは、神話學に於ける模索の結果であり、比喻として把へたのは文藝史的展開に於てであつた。

一、神話學に於ける模索の過程。

イ、希臘文獻に於けるプロメテウス傳説の筋（ミュトス）の吟味。結合構成としての全體。素材、話根と契機との整理。

ロ、方法的整理としての神話學。

記述の分析分類を根據とせるもの、（ワイスケ）

比較蒐集文獻學的。人間起原神話としてのプロメテウス傳説。（ワイスケ、フレーザー、フォクス等）

ハ、近代神話學に於ける展開。

比較宗教學、ナチュリスム。火、アグニ。

比較神話學、プロメテウスIIプラマンク。

民俗學的方法、(ラング、フレーザー等)。

折衷集成、(クツク) 傍系、ハリソン・バツプ。

考古學的方法、(レーナク) 鷲IIプロメテウス。

ニ、プロメテウス神話の社會的論理構造を把握するためのデュルケームのトテミスム理論への照合。

ここより、類個種の一般を通して圖式化する域に達す。氏族と運命との上に於けるゼウスとプロメテウスとの對立を以つて空間的社會構造の限界としてここより圖式へ轉ずる面を把み、歴史的面へ移行す。

二、文藝史的展開

歴史的なるものを象徴の旗印として把へんとすること。

過去の制作の歴史の了解に止る限り旗印の比喻面より把へ得ぬこと。後慮エピメテウスの歴史の把握。

ゲーテに於ける制作的行爲の無礙と自由。

ここに比喻を成立せしむ表現の立場を破るものとして、同時性の超越と自由。對立の最も根本的なるものとしてプロメテウスのなるものとエピメテウスのなるものにまで到達す。象徴へまで高められねばならぬ。

——論文の發表の性質上、省略したところ多く、就中文藝史的展開は實證を自せるため大部となり、文獻提示に終るを以つて全部割愛した。又、ゲーテの對話による制作的行爲の把握は研究的のものではない故ここに省きたい。立論への進行が爲に多少不明瞭となる恐れあるが。

三、行爲、象徴としてのプロメテウス。個の神話。自由を自體とせる內的必然の形式をもつものの把握。

四、カオス、行爲の反復、自由。

プロメテウス神話。

一

文獻以前、或は文獻の底への探求にせよ、亦、文獻の内の或は文獻以後の展開にせよ、先づ必要なのは、この神話の筋の吟味である。

古代希臘に於けるこの神話に關する文獻は、當然總て追求され蒐集されて、如何なる取扱、構想、結合をも可能ならしめるやうに整理され置かれねばならない。希臘自身の地盤を離れて繁りし後世の文獻は、この場合の神話の筋の吟味に於ては、一先づ分離すべきであらう。

ここで神話の筋といふのは、素材、話根と契機、結合とを指さうとするものである。デイルタイがファーレンによつて「アリストテレスの詩學は之をミュトス *Muthos* と呼び、現代の詩學はローマ人のファブラ (Fabula) から筋 *Fabel Fable* といふ言葉をこれにあてて作つた」といふところからして、ミュトスそのものの詩學的面を指すと云つて差支へないであらう。亦ここよりしてミュトスのロゴスと關聯する元本的な廣い用法へも達せられるであらう。

元來、プロメテウスの形象は希臘公式的宗教にては不分明であるが、その道德文藝的思想にては際立つて居るとさ

れるが、文獻上現存せるもの數からしては際立つと云はるる程多い方とはいへず、ヘシオドスに於ける獨異なる位地とアイスキュロスの深化せる問題提出が、このことを常識的に云はしめ來つたと見てよい。他は、神統に於ける副次的員としてその位地を與へられ、又挿話的、修辭的、引用的に用ひられ、多く斷片としてその作品の主題の中に埋没せしめられてゐる。蒐集と整理と吟味との必要なる所以であり、それら作品主題の全體聯關、筋が全體より展開されてゐる面を把へねばならぬ。即ちミュトスの一用法、詩人によつて既に完成されし素材の形成、*σύνθεσις* (*synthesis*) *τῶν παραμυθῶν* 結合 (Combination) *ἢ συντάξις* (*synthesis*) *τῶν μῦθων* 構成する *ὡς* (Composition) 従つて詩全體、詩自身ともなるものを先づ指摘しなければならぬ。

所謂「始めて希臘人に神統を組織し、凡ての神々に夫々の名を與へし」ホメロスとヘシオドスとに於て、ホメロスには、プロメテウスがあらはれぬことは注目されてよい。王者、戰士、行爲、藝術の敘事詩と奴隸、庶民、意識、祭官、思惟、の詩との差異等の説明はこの場合行過ぎである。ヘシオドスのテオゴニアは、それ以前それ以後への唯一の出發點であり、エルガ、その他の詩との比較考證操作によつてのみ進行は開始繼續されるであらう。そのムウサイへの讃歌は、その眞なることの權利を主張するところの詩的認識論である。「眞實を語る」神統記の構成とその神話性、ゼウスの胤であるムウサイの立場に據るプロメテウス、デルポイの認許とポイオチア派の象徴力によるプロメテウス素材の構成結合に於ける選擇とその限界がこの問題である。

箴言詩、サブポイのは確ではない。アルクマン、ピンダロスに漸く結びつけられてゐる。箴言的引用である。

アイスキュロス、そのデオニユソスの幻想とその狂氣とまで稱されし詩的構想力は、この主題を悲劇に取扱ひしとき、その行爲的性格辯證法的二人俳優の創始と相俟つて、凡ゆるプロメテウスのものを呼應させ呼び起すに充分である。その象徴は徹底的で破綻はない。ゲーテが著語してコロスのニユンバイがそぐはぬとしてゐるのは誤感であらう。歴史よりも哲學的にして莊重であり、普遍性蓋然性、可能的なるものを取扱ふ詩、ミュトスの創作 *μυθῶν ποιητικὴ* の好範例である。

アリストブアネス、「鳥」。空想の飛躍、奔放、抒情的旋律にとらへられた、登場人物の型の必然的呼應、バシレイア問題の豫言者として、プロメテウスと全體と聯關、アイスキュロスの喜劇ともいふべきもの。サチエル劇「プロメテウス・ピュルカエウス」は惜しい。

プラトン、哲學的對話篇、ミュトスとロゴスとの交流、プラトンIIプロタゴラスの修辭的ミュトスとプラトンIIソクラテスの實踐的ミュトス、國家科學を要求するミュトスをロゴスへ更にデアロゴスへ解消し、行爲倫理として國家神話より個の神話へ更生せしめんとするもの。

斷片として、墓誌、ソポオクレス、エウリピデス、ロゴグラポイのプレクテデス、シユラクサイの喜劇詩人エピカルモス等。

エウヘメロスの解釋、神を歴史的實在人物として捉へる公理の適用。

アレクサンドレイア、ローマ。二次的ではあるが希臘の地盤を離れてない。古きものの傳承が屢々ここにて始めて發見せられることが多いのに徴しても、その全體の取扱ひの變貌を見るにも、節の吟味に緊要である。

アポロロニオス・ロデオス。アルゴナウチカ、敘事詩に薄暗き巨人、魔術的として修辭的寫實用に取入られる。

アポロロドス。ビブリオテケ、神話要覽のもの、その構成、蒐集排置選擇等につきて神話記述作者の問題 (Aly等)。

ストラボン。ゲオグラフィカ地理書。パウサニアス、希臘記。案内記、儀式及び俗信として民譚としての構成。

ルキアノス。諷刺的對話。辯論術に達者なるプロメテウスにも云はず、神話的人物に對話させる形式の先驅をなすもの。

オルベウス派、プロチノス派、ストア派、基督教に於けるこのミュトス。ローマ、(ヒギヌス・セルヴィウス、オウイダウス、ホラチウス等。

かく兎に角、希臘神話の源泉、その探求に必要と定評さるる文獻類の凡ゆる形式によつて一應取り扱はれてゐることは確である。

しかしミュトスそのものの吟味はミュトスの本來的用法、素材、話根についてでなければならぬ。即ち、敘事詩

人、劇詩人等の眼前にある詩人の加工すべき *Fortuna*、それは傳説、歴史個人経験より發するも問題でないとするものである。プロメテウス・ミヌトスの素材としての整理は題目的にあげると次の如くである。

一、テイタンの一員である。

父はイアペトス。母はクリュメネ。オケアノスの娘にして流と泉の女神。或はアゾプ（プロクルス）、又地の女神テミス・ガイアを母とするものあり。兄弟には、暴勇のアトラス、神意に抗ふメノエテイオス。エピメテウス、これはプロメテウスの對として用ひらる。プロメテウスがテイタンの名をもつてあらはれたのはソポオクレスにて始めてとされる。テイタン・ヒュペリオンはプロメテウスの父方の叔父（ラクタンチウス）。テイタンの本質、オケアノスの特異な存在とプロメテウスとの關係。

二、テイタノマキア

宇宙開闢と神々の世代。クロノスとゼウス、*Saturnia Regna* と *Olympian Conquest*。オトリニス山とオリュンポス山。鬭争過程、殊にエトナ山のテュポオエウス。その戦に於けるプロメテウスの行動。ゼウスに味方或は中立せるテイタン、テミス・ムネモスユネとオケアノスとの關聯。

三、人間創造と人間保護。

人間起原に關するプロメテウスの位地は種々であるが、創造者としての位置をも占めることとなる。プロメテウスの言葉名稱の惠深きものの面がゼウスの戦後、人間絶滅に對する抗議となる。フォキスのパノペウス

四、メコネ。(後、シキユオンと變る)

人間とゼウスとの分立。その間へプロメテウスが牡牛を二分し、一方に肉をつめ外観を悪くし、一方に骨臓物を入れて外観をよくしてゼウスに選擇せしめ、人間に最良する。犠牲の説明、神を試みるものの狡猾、神より人を愛する罪、ゼウスの洞察と怒り等。

五、火を竊むこと。

火の起源。天火と地火。火を人間に齎らすこと、盜火、ナルテックス。火に關してヘプアイストス、英雄フポロネウス、竈の火ヘスチアとの關聯。

六、文化英雄。

家、曆、星占、文字、數、記憶、車、舟、療病藥、夢占、鳥占、その他の占法、鑛物、プロメテウスの魔藥とよぶメデアの魅藥。文化に於けるカイロン・ヘルメス、デメテル、アテナ、ヘプアイストスとの關聯。ゼウスの頭を割つてアテナ誕生せしめたるものその他に於けるヘプアイストスとの混同。

七、パンドラ。

女性。神の復讐の贈物、人間勞苦の因。好奇、罪罰、希望、後悔、メタメライアはエビメテウスの娘(ピングロス)併し斯プラトン派に到つてはプロメテウスによつてなされし靈魂の輝く地上への降下とされ來るであらう。その諸段階。肉體的構成、精神的屬性、倫理的評價、宗教的見方。總てを與へるもの大地パンドロス。總て與へらしものパンドレ。パンドレはハデスより昇り來し女神(オルペウスのアルゴナウチカ)。プロメテウスへの復讐を人間に降すことの意味。エビメテウス。

八、縛られしプロメテウス。

反抗、ヒュプリス、對神者。神の復讐と刑罰。日々に夜毎再生する肝臓を啄み食る鷲。テュポオエウスとエキドナとの子なる鷲。(プレクユデス)。苦惱する神、テイタンの刑。カウカサス、スキタイの岩山。岩。ティチユオス。アテナを犯さんとせるプロメテウス。プファゴスのアルテミスに對するのと比較。

九、解かれしプロメテウス。

忍苦に依る解放、運命、預言、ゼウスがテチスと婚すればその子は父より強力となるであらうといふこと。先見、祕密、沈黙、勝利、和解、恩恵。ヘラクレス、ヘスピリデスの林檎を取るためプロメテウスより忠告を受く。鷲を射落す。ゼウスへの警告と交換、ゼウスのヘラクレスの名譽のための許し、縛刑の印としての腕輪。ヘラクレスの願、カイロンの身代りとなり不死の苦惱を受けることを承認す。

十、デウカリオンの父。

妻の名は一致しないが、地の女神の屬名を持つものなることに注意。ケライノ、バンドラ、ビルラ、アジア、ヘシオネ、プロノイア。土地テッサリア、アジア等との關係。子として、デウカリオン、キマイラウス、エトナイオス、イオ、テベ。エピメテウスの子孫達。イアペトス族と人類。希臘諸民族。ヘレネ。大洪水、ラルナックス、プロメテウスの忠告でデウカリオン夫婦は助かり、石ラスより人間ラオイを作る。ヘレンの父、ゼウスの祭祀を始めしもの。パルナツソス。

十一、儀 禮

プロメテウス

カベイロイのプロメテウス。テバイに於けるカベイロイのデメテルの寵客。サモトラケ、レムノス、農耕神祕教、ディオニソス、ヘプアイストスとの關聯。コロノスに於けるポセイドンと火を齎らせるものテイタン・プロメテウスの宮居。アカデミアに於けるアテナ、ヘプアイストスとの共同安置の像。ケラマイコスに於ける火祭りの一つのプロメーテンに於ける松明競争。オプスとアルゴスに指示さるプロメテウスの墓。多島海北方地方に盛なりし信仰。

かかる内容の羅列的整理は、直に一つの方法に依る整理、組織を要求する。何が本質的であり何が單にまぎれ入つたものに過ぎぬか。何が元本的で古く何がそれより從隨して派生するか。ここに神話學が始まる。

近代神話學の洗禮を受けず、而も恰もシエリング派の神話の哲學及ヘーゲル左派の批判の時代にありしライプチヒの教授、ワイスケの遺稿は、文獻學的方法の純粹とその限度を示すものとして注目されねばならぬ。記述一般に關する考察より神話的記述の分類的考察を詳細になしその範例としてプロメテウスを前IIヘシオドス、ヘシオドス時代、後IIヘシオドス（惜くも紀元前五〇〇年までで遺稿終る）考察してゐるものである。

第一期は神話の創始發出、第二期ホメロスIIヘシオドス時代は結合と潤色、第三期は意味解釋の發達形成と傳播。第一期をとると――

(Das Was) この神話の内容或は對象。

第一に人間のなるものそれ自體にてみられ、次いで神々との關聯に於てみられ最後に人間に關することなく神的なるものに關聯してみられる。

人間のなるものに於ては先づ、睿智的なるものが取上げられる。即ちその時代に應じて實踐的知性的力と行動性。これが初期には

特別の對象に結びついてみられる。即ちプロメテウス神話の「火の使用」「供犠」「女性」。後期に於ては普遍的に（特殊がより集りその概念が普遍的として抽出さる）「賢明」「先見」一般。更に後期、ヘシオドスに至つては道德的關係更に宗教的神祕的となる。これは又本來的には有益なる面が取上げられる。即ちプロメテウスの面であり「發明の智慧」「人類恩澤の關心」「英雄の大膽と剛氣」。後になつて損失的面があらはれる。即ちエビメテウスの愚さ。不遜ヒュプリスはヘシオドスに於て始めてあらはれる。かくプロメテウスは最始は人間即ち思考するものであり、その實踐的關係に於て、初には光の面、後には影の面がとりあげられ、ヘシオドス以來人倫的の面、更に後期に至つてプロメテウスにある神性を形式的でなく内容上認める。

(Wiefeln) この神話の形式と對象との關係。記述的結合。

本來的には單純記述、即ち模寫的である。先見の模寫的人物化、プロメテウスなる名、火の利用、犠牲の牡牛を分つ行爲。概念が感覺的に規定されこれより詩的記述があり、神化することが行はれ即ち信仰的記述がきざすのである。次に至つて修飾的、犠牲、バンドラに於てみられよう。最後に表徴的、イアベトスの族、バンドラの箱。

(Das Wie) この神話の形相（可見・聞的外的手段に對して媒介表象についていふ）

人物のアインハイトから、エビメテウスとの對立に於ける二元性。更にティタンの兄弟達とこの神話に登場する傍役の多元性へ。無規定の形態より規定されしものへ。プロメテウスの個有名に根元的に結びついてゐたものが二つになり更に多數の出來事が一つの主題に於て結合さることとなる。

それは最も單純で粗雑で古い傳説、火を持ち逃げたことより複合的なもの文化の進歩を示すもの牡牛、犠牲、プロメテウスの罰から、遂にはバンドラの構成されし藝術的な洗練されしものに移行する。かくしてこれは漸次に結合されしプロメテウスのものメーアハイトではなくして、一つの神話のそれにふさはしきものの附加と肩代りに依つての發展形式である。

(Wodurch) この神話の藝術、外的手段。

最初は名前のみ、これは神話的人物と神話の端始と同様古い。次に形容詞がつく。口傳、ヘシオドス以前既に可見的形象火の竊み

繫縛、苦痛等あつたと想像され得る。

(Wo und Wenn) の神話の處と時。

古き文獻學的解釋的神話學のこの純粹の限界を破るものは、この中に從僕的に用ひられてゐる比較の方法であり、其が實證的な素材が提供されるとき始めて可能とならう。神々の天地の戰、人間起原、火の起原、女性、大洪水、その他の話根、契機に於て夫々それが遂行さるべきである。この經過を人間起原の神話としてのプロメテウスに於て例示するがこの段階はその性質上單なる啓蒙的に止る故、後の展開に必要な丈を可成簡單に抄してをくに止める。

人間起原に關してその多くの神話傳説を蒐集したフレイザー博士に依つて見てゆくと、大體彼の結論、即ち多くの事例は未開人が自己の始源を考へた非常に相異した二つの見解に大別される。即ち創造と進化とのテオリに分れる。前者によれば、人類は偉大な藝術家、神であれ、英雄であれそのものによつて現在の姿に形造られたのである。後者に依れば、それは自然の經過によつて動物或は植物の低い形より進化したとさる。大體この二つの理論は尙文明世界を兩方に分けてゐる。一方に「創世記」他方に「種の起原」(舊約に於けるフォクロー)。

然らば希臘神話に於ては、これが如何にあらはれてゐるか。ここに希臘神話乃至信仰の特異性がよくあらはれてゐる。即ち希臘神話、宗教は一つのプロセスであり、きまつたプロダクトでないといふこと、そこに一人の宗祖一つのバイブルともいふべきものはないこと、分散性が濃厚で寧ろ行事あつてそれに統一なく、神話が並存的に残存保存されてゐるといふこと、敬虔等の意義がキリスト教的に考へてはならぬこと、形式主義と自由構成とが結びついてゐること、藝術的美的になつてゐること。(ハイドその他)

この特異性を、希臘神話内部に於て比較的方法に依つて記述せんとする、フォクス教授に依つて見れば、希臘神話に於ては人間起原については一つのオーソドックスな説明はない。ポリスの數程、この傳説はある。これは希臘高地の孤立的性格によるものであら

うが、最初の人間が自分等の集團より生れたと信ずるより愛國心に自然なものはないのである。ヘシオドスその他統一せんとして成功してない。三つの過程が大別されよう。

人間は單に原始的力或は地のものより生じた。(自生と進化)——オリュンポス神の一員によつて生れた。(産生と後裔) 生なきものより神性或は半神性の藝術家の手によつて造られた。(創造)。一、アテナイ人(キュクロプ)、ポイオチア人(魚人アラルコメネウス)、アルカデア(ベラスゴス)、テバイ人(龍の齒)、アイアコス(蟻)、水・土・岩、木より發生。二、「神々と人間との父」ゼウスは他のオリュンポス神よりも、家氏族の大なる祖先であると信ぜらる。ヘレン・アイアコス、ラケダイモン、ベルセウス。ポセイDONはアイオリック族、クロノスはカイロンの父、併し女神と可死の人間との結びによる民族の起原神話は殆どない。三、以上に不信なるものは、最初の人間はいはば制作され生産物でなければならぬとする。(ホメロスをアナクサゴラスの先驅としモーゼの後繼とせるもの——ヘシオドス五時代神々とゼウスとが作つた、僞オルベウス、ザグレウス神話。) これは比較的後期とみられる。その過程は土・灰、塵、粘土より作られといふ古い單純なる方法であり、一般的に信じられた。その製作者とプロメテウスとの結びつきは紀元前四世紀頃普通であつた。——メナンデルとフェレモンとはプロメテウスを人間創造者として記述した最初のものであるが、既に知られたものを用ひたに過ぎない。「プロメテウスは人間を粘土より形造つた」といふことはカリマコスに依つて初めて確立される。塑造形成プラティンであり材料は粘土であり、この形成によつて既に生氣付けられ後にセルヴィウス等の天火をもたらし生氣付けるといふやうな他の手段を用ゐない。これはケラマイオスの地方祭祀、ニカゴラスとラクタンテウスに於ける神像製作者の始めを人間作者プロメテウスに當てること、プロメテウスとテルキネンとの結び付き、ケラマイオスの陶器職の守護神としてのプロメテウスにて説明されねばならぬ。(文獻についてはフレイザーのアポルドス註譯、ワイスケ等による。——この人間創作とプロメテウスとの結び付きが文獻に見られ得る後期にて成立せるため、文獻學的方法是尙有力であり得る。)

この説明の試みには再び方法が求められる。羅列的比較は分類的比較を求め、その分類に於て種々の試みが企てら

れようが、更に一步進めねば説明が行はれぬ。それは他の言語、神話、宗教との比較考察を、方法として前面に押し出すことである。これは、歴史的にも、この後引續いてあらはれる近代神話學の先頭をなす。即ちマクス・ミュラーのインド・ユロピアン比較神話、神話の言語疾病起原説と宗教のナチュリスムの學説がこれである。この精神を享けて、アダルベルト・クーンが「火と神酒との起原」に於て希臘の Prometheus = Promantia 吠咤をとなく、ここにプロメテウスの近代神話學への登場となる。種々の批判に依つて、マクス・ミュラーを始め、ポツト、カエギ、ホツプキンス、ブレアル、シュタインタル等は之を修正しつつ燈火のサンスクリット語はプラマンタでそれとプロメテウスの名を結びつけようとする不撓の試みがなされ來つた。

それを見る前に、これの目標にして背景となつてゐるナチュリスムに一瞥を與へねばならぬ。前の比較分類よりこの近代神話學を區別するところのものは、實にこの點にある故である。火、印度の一主神アグニに集中して、その全體系を構成するのがこの目的に最も適合する。

——今回の論文の重點は他にあるためこれを省略す、宗教學の常識でもほどその目的は達せられようからである。——
この Prometheus = Promantia 説を最もよく一括してゐるのはこれを批判してゐるアンドリュウ・ラングがシュタインタルより構成せるものであらう。而もここにその批判が續き、言語學派と民俗學的方法との最も典型的なあらはれを見るので、その對立のままを引用したい。

プロメテウスの全神話を彼が人格化された火である、即ち火神であるといふ信念より解決せんとする傾向は、クーン氏の *Προμηθεύς* の名の巧妙にして尤らしき語原學に依つて強化され來つた。

希臘人は、それを *πομπήεις* 先慮より引き、他の語、*πομπήουια*, *πομπήεα* と結び付けてゐた。又この英雄の智慧をすべて愚行に化して了ふ所の愚鈍な彼の弟に對しては、それに適當なる名、*Εριμβής* 後慮を希臘人は持つてゐた。この非常に自然的な語原學に對して、文獻學者がプロメテウスは實際は、サンスクリットの *Pramantha* 印度の火の棒の希臘的形態であるといふ理論を支持してゐる。この語原學的變化の過程は、*Stanthai* に據れば次の如くである。

水平なる火錐棒に垂直なる火錐棒を鑽むこと——それに依つて火はつけられるのであるが——は、*Manhana* といふ。Math' I shake より來つたものである。前置詞 *Pra* が接頭語とされ、それより *Pramantha* を得る。

併し *Matuivan* は *Asni* 天火を持ち來つたと神話にて云はれてゐる。而して「この神のこの齋らしは、火棒のこの世の孔を鑽むことにあたる同じ動詞 *Manhani* に依つて指定されてゐた。」とて、この動詞は特に、前置詞 *Pra* と接合すると、裂く、ひつたくる、奪ふといふ意味を得る。」(クーン氏参照) シュタインタルは續けて云ふ「かくして *Asni* の齋らしは、火の盜奪となつた。そして *Pramantha* 火錐棒は盗人となつた。神々は何かの理由で火を人間より取去るつもりであつたが、一人の人類の恩惠者がそれを神々から盗んだ。この盜奪は *Pramantha* と云はれる。*Pramathya-S* は「孔を鑽む」と、或は火奪することを好む者、孔穿者或は盜奪者である。」(この後者の語より、希臘の發音法の辭に従つて *Πραμαθής*, *Prometheus* と形を與へられる。「それ故彼は火神である。」)

これ位巧妙なるものが言語學者に依つて會つてなされたことは殆どない。「言語の意味の忘却性。」が火が神々より盗まれたといふ希臘信仰の説明とされてゐることが見らるであらう。

もつと簡潔にこの致説を要約すると、人々は元々は、サンスクリットで或は尙もつと古いアリアン語かで、「火は

摩擦或は鑽むことに依つて得られる」といつたので、何ものもこれ以上科學的で率直なものはありません。彼等は又、「火は *Malatigvan* に係つて齋らされた」といふとき、何ものもこれ以上、神話に詩歌的思考法と一致するものはあり得なかつたであらう。そこでそれから「齋らされた」といふ意味の言葉は、「鑽まれたる」といふ意味の言葉と混雜して、「奪はれたる」といふ意味を獲る。最後に火は、この混雜によつて、盜まれたものだと云はれる。普通の未開の火燧棒を意味する語が、誤解の或る過程に依つて棒でなく一人の人格を示すやうになる、プロメテウスが火を盗んだことを示すやうに考へられる。かくして文獻學者に依れば、火は盜まれたのだといふ神話が生じた他の仕方では希臘人には恐らく發生しなかつたと推定さるべき一神話である。

さて我々は、希臘人がプロメテウスを單に「先見の賢い者」を意味するものと考へたのが正しかつたのか。それとも、ドイツの方がよく知つて居て、その名は單に「火燧棒」を意味したと云ふとき正しいのか、就れと決定すべきでないであらう。併し少くとも、火を盗む神話や、盜火者の神話はアリアン人でない所の、又決して *Panaritan* の語を聞いたこともなかつた所の民族間に流通してゐることを指摘すること丈は出來よう。我々は、*Thlinkets, Ahls, Ardaman Islanders, Australians, Maoris* その他のものが凡て、火は元來盜まれたものだと思つてゐることを見る。

彼等の總ての言語に於て、火燧棒の名が思考の誤謬を引き起し結局、火は元來竊盜に依つて獲られたものだといふ信念に導いたことは、一體信じていいことだらうか。

かかる符號は信じられなく見ゆるならば、希臘人とカローツク人とアトト人に共通なる信念が、希臘人の心では、

語原學的混雜に、オーストラリア、アメリカ等では何か他の原因で起つたのかどうか疑つてみてもいいであらう。實際かかる神話的思慮者は非常に廣い範圍に亘つて存在する。「ラング氏の要約よりフレイザーの「火の起原」の方が豊富に詳しく蒐集してあるが、今は前者に従ふ」

先づ低い民族から始めると、

Gipsland の Muri の間では、火を盗んだのは一人の男であつた。併し彼は一羽の鳥になつた。Toskopa 即ち火は、黒人を嫌ふ二人の女の所有であつた。人間を愛する一人の男が、その女達をたらし込んで、それらの背が向けられたとき火を盗んだ。そして「尾に赤い印——それは火の印であるが——を持つた小さな鳥」に姿を變へられた。

Britany の火を齎らしたものは、黄金或は火色の胸をした^{トリスカ} 鸚鵡である。かかる神話は一石二鳥の役をする。人間に依る火の所有と火を齎らしたものとみなさるる或る動物の特徴を同時に説明する。

他のオーストリアの傳説にては、火は鷹に依つて bandicoot 袋狸より盗まれ人間に與へられた。尙他の傳説にては、一人の男がその槍を太陽につけて照りを得た。

Andaman 島の物語りでは、一羽の鳥が火を齎らすものである。同じ島の他の神話では幽靈精靈となつてゐる。

New Zealand に於ては hau 火の主 Mauika より火を盗んだ。彼は一羽の鳥を介在役に用ひた。

北アメリカの Ahts 族間では、火は獸物に依つて「いか」から盗れた。

Thlinket 人では Yehl 大鵬神が盜火者である。

India のアリヤン間では Soma が鳥達に依つて盗まれた。恰も水が Thlinket 族間で、蜜糖水が Edda に於て盗まれた如く。

Chirocs 族間では、山犬が火を「二人の老女達」より盗んだ。

Veda に於ては、火は自ら隠れ、その隱家から Matariyan に依つて引き出され、Bhriṅu の僧團に與へられた。我々は又、

Manarjan が「火を遠くより持ち來つた」、且つ Brjinn が火が火の中に潜んでゐたのを發見したといふこともきく（リグ・ベ
タ書）

全問題を考察すると、人は神話學者間に餘りにも共通な合理化推理の早計なる類推方法に氣付くに相違ない。例へば、一羽の鳥が火を齧らすものと云はれるとき、どの場合でもその鳥は電光を意味すると結論するのは必しも必要としないのである。他面、この神話は鳥の或る實際の種類の特徴の原因を説明するために存することが多いのである。更に、英雄が火を盗んだとか火を齧らしたとか云はれるからと云つて、英雄を火の人格化であると見なし、彼の神話全部を火の神話として説明する必要はない。プロメテウス傳説は餘りに多くこのやうに取扱はれて來た。彼は實際文化英雄であり、その數々の勳功は例へば土より人間を作つたことなどあるが、盜火はその一つの例に過ぎないのである。

しからば一體何が、盜火の廣く散布せられた神話の起原であるのか。我々は純粹な推測説を述べよう。如何なる種族も火を持たぬものはない。而も火の人為的再生には厄介な目をみてゐる文化された種族もあるのである。我々がオデッセウス五卷四八八―四九三に讀むのは、「高地の農場で、一人の男が近くには誰も隣人が居らず、従つて他の方法で火を求めなくてはならない場合に會はぬやうに、火種を守るため黒い燃屑の中に燃木を、すつかり隠す時のやうにオデッセウスは自分を葉で以つて覆つた。」ホメロスの時代に於てすら人々は火種を得るのに、そんな困難を感じたのなら、火を造る技術の最も早き黎明の時代に於ては、如何なる困難があつたことであらう。更に原始野蠻人の群が敵對し合つてゐることを想像されたい。或る群がその火を消やして了つた時、先づ爲すべきことは火を隣り恐らく

敷哩離れた隣の群より借りて來ることであらう。併し隣りの群が敵對してゐるなら、其の不幸の群は火より斷絶せられる。かかる場合火を得る唯一の道は、それを盜むことである。かかる不安定の境遇に慣れてゐる人間は、火の最初の所有者は、それはいづくにあれ、それに多大の價値を置き、他に傳へることを拒んだと容易に信じたであらう。こゝより火は元々は盜まれたものだといふ信念が起る。この假説は少くとも、言語學説が希臘神話を變化する言語の例外的偶然を以つて説明し、他の廣く散布せられたる盜火神話を暗黒に残して置くのに對して、人間即ち「嫉妬深き種族」の自然的な必要及び熱情性格、列強の火藥庫の祕密に依つて盜火神話の總てを説明してゐる。

以上ラングに依る、言語學派と民俗學派との對立の一端をみたが、ケンブリッジのアーサー・バーナード・クツクは大著、「ゼウス・古代宗教研究」に於て、ゼウス・キヌクロプ・オデッセウス・プロメテウスの關聯をとりあげ、上の諸説の批判と發展を試みてゐる。方法は集大成的な折衷派であり、自ら云ふやうにロツシヤターのレキシコンのゼウスの項とも云ふべきで、亦そこに全體を集中せしめたとみらるべきである。要點のみとる。

Prometheus と Pramantha とは嚴密に云つて發音上等價物とみられぬ。寧ろ燧火 Pramantha が Promantheus の名稱の下にゼウスが Thourioi にて尊崇されてゐることを説明するものであることは大いに蓋然性ある。(ポット・ターン・ハップ)——
オデッセウスがキヌクロプスの目に熱した鐵棒を貫き込んだと云ふ神話は、紐弓でする單純な燧火の道具に關する原始的物語の中にその源を持ち、且つ英雄オデッセウスの背後にもつゝ火神プロメテウスに近い神性のものが立つてゐると想像さる。

Itas, Itax はテイタンの使者であるプロメテウスであつた(ハスユキオス・バツプ)又その名を「熱せられる」itainesthai を意味する動詞と結びつく。この動詞の語根は idh-, Aidi- の弱度 (Aitho 我燃やす Aithō 燃ゆる空) 等作らる。かくてプロメテウスは「火」の神で本質的にあつた。——彼のヘファイストスとカペイロイとの關係によく適合する。この三者は手輪、斧持つもの

として一致。Itax は Itake オデッセウスの故郷 Itakésios, Itakos より分離し得ない。銅貨等にあらはるる美術型に於けるオデッセウス・ヘプアイストス・鬚あるカペイロイスの型の實際上の同一。

尙、Pranantia 火燧は Pramanthi 神話人物から離し得ぬ。即ち Manthu の兄弟の Vira-Vrata (Madhu と Sumanas の息子) の息子たる Pramanthu より (Bhāgavata Purāna 書)

他の諸説。バツプ、プロメテウスはティタン、その眞の名は Itax 或は Itax であるティタンの總稱名詞或は儀式名なるを證明。シユタインタルのプロメテウスとモーゼとの一致。シユルト「西方セミ族のアルファベットの根本符號としてのハーゲンクロイツ一九〇九」プロメテウス火燧の道具の發明者としての彼をアルファベットの發明者としてのプロメテウスと結び付けようとするその連結をなすものは正スワスチカである。カールアブラハム(チューリッヒ派)「プロメテウス傳説は人間生殖力の象徴化である」。

ハリソン「柱神として、鷲は柱神の擬獸化、柱につながれたプロメテウス自ら、柱神の擬人化」。

一九三四年、シオルヂェ・ヂュメズイルが Ouranos-Varuna インド・ユロプ比較神話學の書でティタンについて優れた暗示も與へてゐるが、プロメテウスに關しては解釋問題に於て、神話の哲學的命題の象徴化への利用するための神話の解釋 *exploiter* と同じ目的に神話を全く創作 *Créer* することの差を説いてヘシオドの大なる神話の凡て、特に——プロメテウス・五時代——は詩人が新しい目的一般に道德的なものを利用 *exploiter* せる古い民衆の傳説であるとして直接に考究してゐるところはない。

現在にまで至る神話學で最も優れたプロメテウスの把握をしたものは、トテミスムを重視するサロモン・レーナクの鷲にプロメテウスの説であらう。Aetos Prometheus 「儀祭、神話及び宗教」。「オルフェウス」。

プロメテウスに依つて忍ばれし苦痛の性質についてはここが重要なものにも拘らず、火と結びつけて論ずる近代神話

學がいづれもこの點を看過し來つた。「私が謎の言葉であるやうに見えし神話の鍵を見出したのは正しく、この刑の特異な性格の中にあるのである。鶯の役割の中にあるのである。神話の總ての説明は眞證を装はんとするならば、之を考量し斟酌せねばならぬ。私が之を眞證の如く提出することを敢てするのは私の説が、この要素の孰れをも蔑しろにしなかつたといふ理由からである。」ここで我々はその積極説を要約すると――

希臘神殿の破風は、*Aetos* 或は *Aetonia* を持つてゐる。それが、その示す外面の、一匹の鶯の翼を張つてゐる姿の影繪との類似せる原因であることは、考古學に依つて、一般に承認されたる意見である。之はピンダル等の典據に依つて深化せられ、コリント人は神殿の破風に鶯を彫刻した事實が示される。この鶯は雷電を遠ざけるためにそこに置かれた。一體鶯は古代に於て特異の位地を占めてゐた。例へば、ゼウスの鶯は、多くの王族がその子孫を稱した神であつたし、古代人は他方、鶯を雷や太陽即ち最も鮮やかなる天の火の示現に同一視し、或は密接な結合を持たしめる。アイスキュロスもゼウスの鶯を、火を持つもの *τὸ φερόμενον* として性格付ける。(斷片一七五)

古典神話の物語の下に洞察せる鶯神は全く、人類の恩澤者で、人間に太陽の火花を齎したものであり、更に前兆占の鳥で人間にその未來について明かにする。種々の典據例示を要するに、鶯は單に力ある鳥でなく、飛ぶものの王位の王である。人間を愛し、先見であり、慎重である。人間の相の下に考へられたなら、いはば *προμνηστικός* の品質形容詞にふさはしいものであると云へよう。一語のフランス語に譯すは困難ではあるが、*Mais où l'idée de prevoyance bienveillante et au premier plan, comme dans l'équivalent allemand Fürsorger et dans le dérivé de l'équivalent latin provisor, le paternel proviseur de nos Lycées.*

しからば古代神話のプロメテと前史神話の鷲とは、同じ役割を人間に對したと見られても、同一の觀念であるとしても、それ故却つて問題が浮き出すのは、何故に常に人間に優しい鷲が、ここでは人間の一人の友、超人の刑罪執行者たらざるを得ないのかといふことである。これは最初の提示せる、古代の神殿の建物に於て、雷電に對する守護者として、一羽の鷲が入口の下方に、つけられることに依つて解決せられる。

それは剥製にされるか、そのまま、しつかりと釘で、木組に打付けられる。胴を上から下へ棒杭の如くつき立て翼と爪とを釘で打ち貫られ、綱をもつて止める。かくの如く守護者 *Ilporobor* の鷲は正しく神話のプロメテの如く待遇せられる。而もその神性と決して矛盾せぬ。即ち神獸を死に附することは原始宗教に共通の様式である。擬人主義が、ペラスゲス、ミケネ、アリアン族の北方よりの侵入によつて、その影響に依つて動物化主義や植物化主義の段階にありし希臘に輸入せられたときに、プロメテウスは必然的に縛せられ釘づけせられし人の如く解せられた。そこにしかし半神の人物に加へられし野蠻なる取扱のモチーフを想像することが必要である。擬人化されたプロメテの原型守護者の鷲は自らその説明を供す。鷲は人間の恩惠者として通用する。天まで昇り人間のために天の火を齎らした。人類が最も貴重なる賜物を受けたのは彼からである。ゼウス、天の新しき主、嫉妬深き神に依つて殘酷に罰せられたのは、この理由からでないのか。併し乍ら鷲が傳説の一部を作す。最早排除されることは出来ぬ。それは唯、役割を變へる必要がある。人間の姿に解せられし半神に何かの仕方で聯關せしめられる。或は友として或は敵の名義でアドニス傳説に於ける如く、犠牲とさるる猪は人間殺し猪たるを要し、ヒツポリュトスの傳説にては、犠牲とさるる馬は、その主殺しとして認められた。これと同様に、神聖なる鷲會つて犠牲たりしものは死到執行者たるを要す。爾後、天神

の使者たる鷲は天の火を盗みし豪膽者の上に其の復讐の手配の役をなす。かくして Prometheus は云はば、自らを二分する。この名を最初荷つてゐた鷲が、プロメテの敵となり苛責者となる。

ここでレーナクの積極的提説の解決を見る。現在では打破り得ぬ結果を打ち出してゐると思はれる。難は餘り巧妙過ぎる點にあらう。「非常に古いことを問題にしてゐる所の、全歴史以前のものと、疑ひもなく希臘人自身にも知られてない古きものを問題としてゐる所の私の解釋は確證の姿態を取ることは出来ぬ。それに對して、いくらかの蓋然性を請求する丈で私に取つて充分である。」

希臘宗教にトテミスムの理論を適用しようとすることは、先づ問題となる。併し此の解決に役立つものは唯、「なさるべきことは、臆説を試み、之を出来る丈、方法的に諸事實の統制の下に服せしめることである。」(古野清人氏譯「デュルケーム宗教生活の原初形態」最後の句)レーナク、ハリソンその他、その試みに努力し來つた。事實、希臘神話學に於ける、動物植物と神々英雄人間との關係、神々の寵獸、メタモルフォゼ、氏族の名、メテンフィキシス、イニシエション、犠牲等、之に依らざれば解決出來ず、又少くとも現在これの適用が最善であり最も生産的であると思はれる故に、これを實驗してみたい。而もその徹底の意味と社會學の見方に據るのを重んじてデュルケームのそれに據りたい。(ハリソン参照)

「それで、研究されて來た極めて見すばらしい諸社會に於て、吾々は最も基本的な宗教的概念が作られたところの要素の或るものを知覺するのに實際に成功したとしたら、吾々の探求の最も一般的な結果を他の諸宗教に擴大しては

ならない理由は存しない。」(上掲書)

實證主義をその方法とするデュルケームの成果的理論面を臆説として受けとり、レーナク等の到達したところより出發してプロメテウス神話を一實例として吟味しよう。プロメテウス神話は近代神話學に於て既に見し如く、始めから全理論を背後にひかへた實例での論争の器として用ひられて來つてゐる。プロメテウスによる實驗は希臘神話學に於ける一つの試金石である。これは一つの資財ともなれば急所ともなる。その理由をも序に解明出來はしないかと思ふ。

さて、先づ「トテム的理念に本質的なるもの總て」はデュルケームに依つて次の如く示される。

宗教力、無涯無名の力、マナは氏族の無名な集合力以外のものでなく、亦後者はトテムの形態の下でのみ精神に表象されるのであるが故に、トテム的記號は神の可見的姿の如きものである。

氏族は、あらゆる種類の社會と同じく、それを構成してゐる個人意識の中に且つ又これによつてのみ生きてゐる。よつて宗教力はトテム的記號に合せられてゐると考へられてゐる限りは諸個人に外在し、また彼等に相對しては一面から一種の超絶性を與へられてゐると思はれてゐる故、自己が象徴してゐる氏族と同じく諸個人に於てまた彼等によつてのみ實現し得る。よつてこの意味から、それは彼等に内在してゐるものであり且また彼等は必然的にこれを内在してゐるものとして表象する。彼等は宗教力が自己のうちに現存して働いてゐると感ずる。これが人が自己のうちにトテムに宿つてゐるのにも比すべき原理が存してゐると信じた理由であり、聖なる特質を自己に歸する理由もここにあり。靈魂の觀念。

トテム種類の動物は尙、同じ聖なる性質を有さねばならぬ。即ちトテム的動物が氏族の記號、換言すれば、自己固有の畫像に似てゐるからである。而もそれは人間以上にそれに似てゐるので聖なる事物の體統に於て高位にある。勿論、これらの二存在は同一の本質を分有するから、その間には密接な親縁が存する。兩者ともにトテムの原理の或るものを化身し、動物が人間より著しくそれを化身するやうである。

聖なる特質は最も高い段階に於て傳播的である。従つてトテム的存在から、これの遠近にあるあらゆる存在へ互つて擴充する。かくて次第にトテムに副トテムが結びつき、また原始的分類が譯出するところの宇宙論的體系が建設されるのである。

之を我々が探求してゐる課題に結論的に當てはめると、

- (一) トテム的記號は、鷲の記號。
- (二) 氏族は、肝臓を靈魂の座と信ずる人員より成る氏族。
- (三) トテム的動物、鷲、それは聖とされる。
- (四) 鷲より種々の、雷、太陽、火等への擴充。

これについて簡単な検討をして置かう。

(一) について問題は、この氏族をしてこの記號を選ばしめたものは何かといふことである。一般論では、「社會をして自己意識をとらしめるに必要な記號主義は、この意識の繼續を保證するために同時に不可缺である」。「氏族とは本質的には、同一名を帯びて而も同一の徴を圍んで繋ぎ合ふ諸個人の集合である。名とこれを物質化した徴を取り去ら

んか、氏族は既に表象され得ないのである。」何故にしかれば多く動物より取るか。「經濟的環境の本質的要素として又トテムセンター附近に最も傳播してゐた動物又は植物を標章としたやうに思はれる。」この選擇は異つた集團間で多少とも合議され協定なしには行はれなかつた。」特殊氏族と特殊動物とを結びつけるもの、選擇の考察により「事物の內的性質が之をして禮拜の對象とならしめたのでない」といふデュルケームの根本主張が困難を生じてくる。

やはり、マナの強く有せるものへの選擇の傾向は免れぬであらうし、或はその集團の意識へさう映つたもの、少くとも何らかの內的連關あるものを採ることを避けられぬであらう。鶯を採りしものは後年王族がその後裔を誇稱し、或は鶯を個人的トテムとせるもの鶯のトテム氏族の者が預言の才ありとせられるやうに、その特異なるマナに惹れしものであつたらう。希臘にて多く鳥をトテム信念にて對した事（ハリソン、テミス参照）而もその中の王者然とした鶯は、社會的にその特性が力あるものとして構成され來つたのも事實であらうが、自然的な威壓をも與へてゐたことも否めない。鶯のトテム記號の永續性普遍性もここにあり、恐らくより強力のトテムの選擇の對象となつたものであらう。しかして之をトテムとした氏族の人員は、その特性をプロメテウスとしたとみるべきである。又(四)の問題副トテムの擴充は、その傳播性は、この同じ選擇感情の中にあつて、火、雨、雷、稻妻、雲、太陽等々の關聯に於ける分類を可能ならしめてゐると見るべきであらう。

この點に、デュルケームのトテミスに對するナチュリスム及びアニシスムの逆襲がある。

(四) についで。「トテムが個人化することに依つて寸斷され且つかくして分離する小部分の各々が精靈の役割、身體に宿つてゐる靈魂の役割を演ずることは確かに眞實である。」「靈魂のうちには肉體の或るものが存する如く、肉體に

は靈魂の或るものが存する。組織體の若干の局部若干の產物は靈魂と全く特別な親和力を有してゐる。心臟息胞衣血影肝臟、肝臟の脂肪、腎臟等がこれである。これらの様々な物質的基礎は靈魂にとつては單なる住所ではない。これらは外部から見た靈魂そのものである。」希臘にて靈魂は、息、呼吸、鳥、小さな翼あるもの、蝶々(プスキケ)蛇等と表象されるが、その座を肝臟としてゐた。(ワイスケ・シモンツ等参照) 又、一方、肝臟がトテム記號とされてゐる例もオーストラリアにあり、何がかく結び付けたのか又しても問題である。夢がそのモデルを供給したか感覺的連想か——驚で何故ないか黒驚の例も神話中あることはあるが——ともかく肝臟は靈魂と關係した特異なものであることは否定出來ない。

「個人なき社會が存在しない如く、集合體から脱却する非人格力は個人意識——ここで自ら個別化する——に化身せずには構成されぬ。實際そこには異つた二過程があるのではなくて、同じ唯一の過程の異つた二形相があるのである。」

氏族トテム「驚」と個人靈魂「肝臟」との相關せるかかる氏族が、部族との關聯することに於て、アイトス・プロメテウスが祖靈として中間項を占める。それはデイモンである。(ハリソンの英雄デイモン、Year-Dennon) としての取扱ひに關係付けることは餘程警戒されねばならぬ。)

これらは受胎と看護との役をする故、祖先神であり、守護者であり、集合的祖先である。「祖靈の多元性より部族神への觀念へ移らしめて助けて力にあつたのは諸開化的英雄がこれである。」

バツプの證明、「プロメテウスはティタン、その眞の名は Ithas 或は Ithax であるところのティタンの總稱名詞、

或は儀式稱號である。]テイタンの開化デイモンの要素、クロノス・プロメテウスを考へ合せて、テイタン族は之に當るとみてよいであらう。このプロメテウスを地盤として部族神と開化英雄との分立を見る。鷲Ⅱゼウスと、鷲Ⅱテイタンとの分立。ゼウス・プロメテウスと、テイタン・プロメテウスとの分立への過程である。鷲Ⅱゼウスは部族的トテム、鷲は氏族トテム、鷲Ⅱプロメテウスは個人的トテムへの傾向を有し、靈魂肝臟への關係せしめらる。「個人的トテムは自我又は人格——靈魂はその不可見な形態である——の外的な可視的な形態に過ぎない。」祖先神たる點に於て、クロノス、イアペトスよりゼウス「すべての神々及人間の父」とヘレネの祖デウカリオンの父としてのプロメテウス、後の人間創造への發展の萌芽を有する。又、この分立に於て宇宙論的分類は、鷲Ⅱゼウスの方に太陽、雷、稻妻、雨、天火等、鷲Ⅱプロメテウスの方に、地火、各種技術、預言等、前者に神的、後者に呪術的なるものがわりあてられてゆく。而して形容傍名より脱して、プロメテウスとゼウスがその名の人格神として確立するとき、プロメテウスは肝臟をもち、ゼウスはその使獸として鷲を有することになる。ここに我々は所謂オリンポスの覇權を研べねばならぬ。

ここに希臘のトテミスムを破りし因とオーストラリア人のトテムを守る因との洞察がなされる「即ちトテミスムは本質的に聯邦的宗教であつて、ある程度の中央集權を凌ぐに至れば、トテミスムでは無くなる」といふのはこの場合十分の説明とはなつてない。

オリュンポスの制覇、擬人主義の彫塑的確立は、ホメロスの名の下に紀元前八五〇年頃、記録上にも確定されようがエーゲ、ミケネ、クレタの前文化、ドリア族の前一一〇〇年頃の北方よりの侵入、その後狩獵遊牧民の土着農耕民へ

の轉化、夫々の段階の相互交渉等量り知れぬ問題が横つてゐる。しかしなるべくプロメテウス神話のトテミスムよりの解釋を離れずに、その跡を探索しよう。ここでプロメテウス神話に堅く結びつき或は變貌して殆ど埋没し、或は神話的に置かれてゐるその儀禮的面を見なければならぬ。ヘーゲルはその美學に於て次の如き示唆を之に與へてゐる。即ち希臘古典的藝術形態の形成過程に於て本來的象徴化の段階が先づ克服されねばならぬ。この重大なる轉換點を説明するものとしてプロメテウスの傳説は取扱はれる。動物的なるものの顛落、貶下は犠牲の行事にて最も鮮明であらう。ヘーゲルは尙英雄達の有名なる狩獵、オヴィドを代表とするメタモルフォゼの物語等へ廣い目を放ち組織化しようとしてゐるが。

ハリソンはそのテミスの Year-Daemon としてのヘラクレスの儀禮に於て次の如く述べてゐる。

「パウサニアス傳へて曰く、「ファイストスがシキユオンに來たとき、英雄としてのヘラクレスに捧物を獻じてゐる (evayricouras) のを見た。併し、ファイストスは神としてのヘラクレスに犠牲を燒した (beva) として今日でもシキユオンの人達は小羊を殺しその腿を祭壇で燒き、その肉の片を恰も神聖化されし犠牲であるかの如く食ふ。そして肉の他の部分は英雄へ捧げる如く獻ずる (devota, evayricouras)。」

ファイストスはクレタに於けるファストスの名祖英雄であり得る。クレタより彼はシキユオンにウラニア・ゼウスの儀禮を齎した。總てのオリンポス神に共通の儀式は勿論、燒く犠牲であつた。崇拜者は一部を食べ他は燒くことによつてよい匂となつて上天の神々へ達するやうに氣體化された、贈獻犠牲であつた。それはパンス・ペルミア、テスマプオリアの儀式にみられる如くタブー evayricouras である。ヘロドトスはヘラクレスの二重性に當惑しつつ次の結論に

達してゐる。ヘラクレスへ二重の崇拜を捧げしこれら希臘人はこの點、最も賢しくやつてゐる。犠牲の一つは不死とオリュンポスのタイトルを持ちしものへの犠牲に焼き、他は英雄へとして犠牲を獻ずる。これら二重の犠牲を捧げし賢き希臘人の最初の者はアテナイ人であつた。ここにハリソンは註として、ヘシオドスの時代シキユオンはメコネと呼ばれた、名の變化は普通人口のある變化を含む。ヘシオドスの如何にプロメテウスがゼウスを欺いたかといふ奇妙な傳説の蔭に、かかるものが横つてゐるかも知れぬ。Switschen より Oben への犠牲創立者の民俗學を更に廣い比較検討にのこし置かねばならぬ。」

我々はワイスケによりこの都市がペラスゴス、イオニア、最後にアカイアの種族によつて建られ亡され新建され、名もアイギアレア、テルキニア、メコネ、シキユオンと變つてゐることを知らされるであらう。

しかし我々はデュルケームに歸つて説明してもらふべきである。この神話は供犠のそれであることは先づこれ丈で見當つてもよいであらう。而るとき、「インテイチュマが供犠的體系の萌芽を含んでゐると如何なる意味で言明し得るかが今や判明したのである。供犠は充分に構成された時に呈示する形態の下では、二つの本質的要素で合成されてゐる。即ちコンミュニオンの行爲と奉獻の行爲とによつて。信徒は聖食を吞込んで自己の神と交通する。と同時にこの神に供物をなす。この二つの行爲をインテイチュマに見出しうる。差異はただ、固有の供犠では兩者が同時になされるか或は直ちに連続するが、このオーストラリアの祭儀では兩者は切斷されてゐる點にある。」「何れにしても供へる行爲は精神のうちに、ある道德的主體——これをこの供物は満足せしめるためにある——の觀念を當然にも喚び醒すことは明瞭である。……確かにこれらの行事は自分らのみでは神話的人格の觀念を促すには不充分であつた。け

れども一旦この觀念が形成されてからは、これらの儀禮の性質そのものによつて、これは禮拜の中に穿入するに至つた。これは行動や生命にもつと直接に混じて、同時にまた一層の實在を獲得した。よつて禮拜の實行は勿論二次の様式に於てではあるが、それでも注目されるに價する様式に於て、宗教力の人物化に盡力したと信じ得るのである。」

ここに臣下の貢物奉供、斡旋の交換等の二次的思想が生じ、殆どこのプロメテウス神話の解釋とそのままなり得るが、更にかの神性を侮辱したとする詐欺の觀念の發生も次の説明で十分であらう。「根底では眞實の瀆聖を構成しない積極的儀禮は存しない。何となれば、人は聖的存在と柵——これは普通には人を聖的存在から分離しておかねばならない——を超越るなしには交通し得ないからである。重要なのは、瀆聖はそれを輕減せしめる用心を以て成就されることである。」

何故に驚でなく牡牛を以つてするか。我々は農耕儀禮との接觸面を明かにする必要がある。「供犠には一體大多數の農耕禮拜に於て遭逢する他の行事との著しき類同があり、農耕儀禮は禮拜の最も高い形態の基底そのものにある。」

因に、ヘーゲルはこれについて宗教哲學及美學の中で面白い表現を試みて居る。

プロメテウスは人間の生活を技術の熟練に依つて容易ならしめたことは、感謝すべきものとして辯護される。併しにも拘らずこれは人間の悟性の力である。それは尙テイタンに屬す。古き神である。何となれば此の技術は尙、法則ではない。人倫的な力ではないのである。さてセレスもプロメテウスの如く、人類に恩恵を與へた女神として現はれるが、新しい神々の内に數へられる。それは首尾一貫しないのではない。何故ならば、セレスの教へたのは農業であつた。それには直に、所有、更には結婚、風習、法律が結びついてゐるからである。「……ヘブアイストスは元より火とそれに聯關せる技術を彼の活動の要素として持つて居て、それで居て尙新し

い神ではあるが併しゼウスは彼をオリュンポスから投げ落し、ヘファイストスは跛の神として残されたのである。」

プロメテウス神話に於ける農耕神話との接觸は比較的後期とみられる。母、妻は地の女神の呼稱をもつこと、カベイロイ、デメテルとの結合、カピトリヌ博物館の石棺にある浮彫。(スチユワートはプラトンの神話の中で新プラトン主義的として一々人物を指摘しつつ説明してゐるが遂に、説明してないのは刑罰を受けてゐるプロメテウスが右足をのせてゐる所の下半身は地にある女の上半身とその側の小さい子それがかの豊饒の角を持ち、かの女がその一端をもつてゐる形象である。デメテルであらう。而るときプロメテウスの刑罰とデメテルのなげきとの秘義的一致を示したものと云へる)祭祀としての火祭、松明競争、これは増殖儀禮の一つとして各所に見られる(フレーザ参照)而して希臘的形態をとり、職業の變化もあるがここに「模倣的儀禮と記念的儀禮の悦しき祭典」の一端が覗はれよう。

デメテルとの關係によりデオニュソスとの關聯も生じてくるが、カベイロイの種々の形態、サモトラケのカベイロイ等より我々は農耕儀禮よりオルフェウスの秘教等に接近しつつあるのを見る。我々はレーナクの大膽なる説明を以つて農耕儀禮との關係を打切り、トテミスムの他の面に歸りたい。「オルフェウスは、藝術上ではその頭に狐の皮をもつて現はれる。彼は單に、「狐」といふ種族の女達に依つて寸断される狐に外ならない。この女達は傳説ではバツサリデスと云はれた。さてバツサレウスとは狐の古き名である。」「ザグレウスはゼウスとペルセポネとの子であるが、ヘラの嫉妬によつてザクレウスに對して煽動されたティタン達を逃れるため、彼は自らを牡牛と變へた。ティタンは聖なる牡牛の信者達であるが、それを殺して食ふザクレウスの儀式にては、それはよき牡牛と呼びかけられる

ことを止めぬ。ザクレウスがゼウスの慈悲に依り再びディオニュソスの名で生きかへるとき、若き神はその額にその動物起原の印として角を持つ。牡牛はゼウスとディオニュソスの獸である。」

シエリングがディオニュソス神話を底に有せざる神話は神話として成立しないといふとき、外的公開的神話宗教に内的密教的秘義と相俟しめて希臘神話の哲學を展開するとき、最もよく農耕儀禮と高度にされし宗教觀念との關連を見る。即ち第一ポテンツのディオニュソス、「過去のディオニュソス」ザクレウス。第二のポテンツ、「現在のディオニュソス」バツコス。第三のポテンツ「未來のディオニュソス」ヤツコス。これがデメテル、ペルセフォネ、コレの神話に對應する。ここに死、悲しみ、苦惱より、再生復活、悦び、解脱の神話及び密儀の入社式あり、直にその下に季節、増殖の農耕儀禮がありその基に、リズムを生ぜしむ供犠があり、これは又、イニシエーションと離すことが出来ない。この點に苦惱するプロメテウスは供犠神話程分明でなくとも、埋没され變形された形に於ける或る(トテム的)儀禮の説明神話とみることには餘りに冒險であらうか。

我々は、プロメテウス神話に於て二つの苦惱の姿を見る。刑罰され縛られたプロメテウスの苦惱と、カイロンの苦惱の身代りとなることの二つである。その二つの差異は禁欲的儀禮と贖罪的儀禮との差は思はずものである。「禁欲的儀禮は大いに固苦缺乏禁戒截斷を含んでゐるが、これらは無感覺的な確乎さと一種の沈靜とを以つて耐へ忍ばねばならない。それに反し、こちらでは喪心絶叫落涙が原則である。苦行者は苦惱の彼方にあることを自身及び仲間目に證するため自らを苦しめる。喪では悲しんでゐることを證明するために自らを害ふ。」

「聖を俗から分離する柵の故に、人は自分のうちの俗なものを剥ぎ去ることを條件としてのみ聖物と内密な關係に

立入り得る」ことは供儀の際に觸れたところである。ここに消極的禮拜として戒禁、タブーの體系がある。

ハリソンが「かかる人は幸なるかな。これらすべてを知り、不死の神々を怒らすことなくその仕事を爲す者、鳥の占兆を知り、タブーを守るもの」とヘシオドスのエルガの最後の句を譯出してゐるのは蓋し名譯である。

「而も遵守することが何らかの程度で苦行的特質を持たぬ禁止は存しない。……普通消極的儀禮は殆ど消極的禮拜への準備として役立つのみであるがしかし従屬より脱して禁止の體系が膨脹して生存全部を侵略するほどに誇張されることがある。かくて體系的な苦行主義が生れる。……共に等しく人は俗から分離する努力をなすのみで自己を聖化するとの原理に立脚してゐる。」

以下デュルケームの敘述は、さながらアイスキュロスの縛られたプロメテウスの説明である。

自己の天性に暴力を加へずしては、自己の本能を痛ましくも打挫かずしては、吾々は俗界に繋つて我々の一部分をなすものから脱却し得ない。換言すれば消極的禮拜は苦惱せしめることなしには發展し得ない。苦惱はこれの必然的な條件である。かくて苦惱はそれ自ら一種の儀禮を構成してゐると看做さるるに至つた。それはたとへ人工的にでも探求し促進すべき恩寵の状態であると見られた。當然その伴侶である禁止の體系と同じ資格でそれが交付する力能や特權の故に。

宗教生活に於ける苦行的行事（の修業）は、任意的無茶な狂暴ではない。それは人が形成され浸されるところの、彼が無私無慾と辛抱との性質——これらなしには宗教は存しない——を獲るところの必要な學校である。この結果を得られるためには、苦行的理想が特定の人物——儀禮的生活のこの形相を過度な位に表現するのが云はば専門であるところの——に著しく體現されることは好ましい。蓋しこれらの人物は努力を懲瀆する生きたモデルの如くであるからである。大芳行者の史的役割はかくの如くであつた。（キケロの忍苦論に於てプロメテウスにアイスキュロスが餘り苦痛を述べさせ過ぎてゐると非難してゐる。參照）

けれども、苦行主義は單に宗教的目的に役立つのではない。ここでも他と同じく宗教的禁止は社會的道德的の利害の象徴的形態に

すぎない。……あらゆる社會生活に固着してゐて、あらゆる神話學やあらゆる教義に殘存する運命の苦行主義がある。

尙、イニシエシオンに於ける苦行に於ての戲弄についても注意してをくべきであらう。

カイロンとプロメテウスとの結びつく神話を贖罪的儀禮、喪のそのの説明神話と看することは、これまでのに比して多少無理の感がないでもない。しかしカイロンが偶々ヘラクレスの射し毒箭に當つて、見ては居られぬやうな苦惱をなし生より引き離してくれと苦悶の叫びをあげる——後、ヘラクレスに解放されその願を承けてプロメテウスがその不死性を引受けて、カイロンは死にゆくこと。ケンタウロスの集合とパニク。

喪の儀禮的態度は義務的である。「個人が死ぬと、屬してゐた家族的集團は、微弱にされたるを感じ、この弱小に反動するために集合する。……泣いても歎いても、それは單に個人的哀愁を譯出するためではない。それは周圍の社會が時折に想起せしめないではおかぬ義務の感情をみたすためである。他方また人間の感情は集合的に確認さるる時には強化することは知られてゐる。悲哀は喜悅と同じく意識から意識へと反響しつつ高揚し擴充する。……悲哀のパニクにも似たものが生ずる。苦惱がこの程度の強烈さに達するとこれに一種の激怒が混淆する。……集合的の苦惱と激怒とを放射し得る生贄を見出す欲求に驅られる。この生贄を人は當然にも外部に求めに赴く何となれば未知者は抵抗の極小な主體であるから。身代りの役。」

しかし死が共同社會を惱しうる唯一の出來事ではない。窮迫、異狀事變、脅威、儀禮上の違反等、人間の保護者としてその大きな困厄の際のプロメテウスの役割、これは殆ど埋没してゐるが、埋没したと推定は充分なし得るのである。デウカリオンの大洪水その他。

最後に、プロメテウスが「好意的宗教力であつて、物理、道徳界の保護者生命健康人間が尊敬するあらゆる特質の結與者」として愛と感謝とを以つてみられつつ、「他方には不秩序の生産者で死や病氣の原因であり、瀆聖の教唆者である不純な悪い威力」として恐怖と驚愕との感情を人は抱く、このことは一體何を意味してゐるのか。「淨と不淨と、聖と瀆聖と、神的なものゝと惡魔的のものとの間。」

ここでもデュルケームは美事な説明をなしてくれる。

プロメテウス神話へのトテミスム適用の成功の實證の最後を飾るものといへよう。「或るものの聖性を作つてゐるのは、それは聖性の對象である集合的感情である。それを孤立せしめる禁忌を破つて、それが俗的人物との接觸に入るときは、この同じ感情は傳播的に俗的人物に擴充して獨自な特色を刻むであらう。ただこれに到達するときには、それは起原の時のそれよりも極めて異つた状態にある。この不自然な過度な擴張が含む俗化によつて挫かれ激化せられて、それは侵略的となり破壊的な暴行に傾く。それは蒙つた無禮に對して報復し様とする。この理由から感染した主體は近寄るすべてを脅やす未熟練で有害な力によつて蠶食されてゐる様に見える。引いて、それは疎隔と嫌惡とを鼓吹するのみである。それは恰も缺陷と穢れとを印されてゐる。それでもこの穢れは、他の狀況では聖化した同じ心的状態が原因である。しかしかくして惹起された激怒が贖罪的儀禮で充足されるや鎮められて衰へて了ふ。害はれた感情は緩和されて當初の状態に立歸る。従つて、それは原本に働いたと同じく再び働くのである。害するために聖化するのである。それは結びついてゐた對象に傳染するのを續けるので、後者は再び俗的になり宗教的に無關心たり得なかつた。しかしそれを占めて居ると思はれた宗教力の意味は變形した。不淨から淨となり、淨化の器具となつた。」

大體以上で、デュルケームのトテミスム理論をそのまま適用することに依つて、プロメテウス神話儀禮を體系付け得たつもりである。兩者を全部素直に對稱するならば、兩方の側に於て、無理も曲解も引用の都合よい抄述も、主なる題目の省略無視もないことを承認されるであらう。而して前者は今後實證主義に立籠つて後者と殆ど接觸しない。

神話學に於て模索し來り、その最終の段階にて把握し得たものは、氏族に於ける部族大神と個人とであり、氏族トテム、部族トテム、個人的トテムに於て、種の上に成立する類、個を概念する根據を得たことである。形像は直接に概念と結びつけられぬ、それはつねに圖式によつて媒介されねばならぬ。「現象とその單なる形式とに關する我々悟性のこの圖式性は人間の心の深みに於ける隠れたる術である。」(カント天野氏譯)それを社會に求め、圖式化を成立せしめんとしたのである。即ちプロメテウス神話を社會論理的構造に於て把み、類個種の一般を通じて圖式化する域に達したといつてよい。

我々はプロメテウス神話が希臘神話中、最も正面より全面的に、人間的、人倫的、宗教的、政治的事柄を取つた神話であること、社會的性格を最もはつきりもつものであることはこれ迄にても大體あきらかにされた。かかる社會的構造をパトスの把へて問題となしたのはアイスキュロスであり、ロゴスの傾向に於て政治哲學の問題としてとらへたのは、プラトンであることはこの神話の性格を物語るものであり、かかる社會に因する宗教より、藝術と科學、概念範疇の成立を説くデュルケームの社會面に於ける徹底性がよくその性格をえぐり出し得たものと一應云へるであらう。而してその點にこそ却つて批判せらるべき問題がある。即ち我々は以上の如く部族大神ゼウスと個人英雄呪術師プロメテウスとの對トテム氏族よりの成立をみたが、アイスキュロスにあつては、それは新しき王ゼウスと人類愛の

テイタン・プロメテウスとの運命の上に於ける成立であり、プラトンにあつては、ノモス、アレテとプュシス、テクネとのポリスに於ける成立を把へてゐることを知る。そこにあつては夫々の立場に於いて、いづれも空間的な社會的面の徹底はあるが時間的な歴史的面の稀薄はどうしても見逃せぬ。圖式がこの最後の要求とされた所以である。このことはデュルケームの宗教社會學に於ける難點であり、その分業論を以つて反駁もされようが、トテミスム及宗教に於て、徹底の意味でもあらうが時間面の排除は看過せぬ。又一方これは所謂神話一般の難點であり、希臘神話の自然存在論的性格の難點でもある。即ちオリュンポス神の彫塑的性格、觀念へ固定されし過程、「オリュンポスの神々は高度に分化されしモイライであるに過ぎぬ。モイライは分つもの部門である。それは時間的なホライの空間的相關者である。デケの車は時を通つて動くが、モイライは空間の中で仕事する。」この點は多くの人々によつて指摘され來つたがハリソンの表現を借りた。

我々はここに氏族と運命との上に於けるゼウスとプロメテウスとの對立を以て空間的社會構造の限界とし、ここにこの神話の圖式へ轉ずる面を認めつつ、尙、神話の象徴性よりその歴史面への移行の道を探求したい。

マレーは希臘宗教の五段階のオリュンポス制覇の篇を次の如く終らしめてゐる。「——かかるものが後期希臘人の高級人士に於けるオリュンポス宗教の性格であつたと思はれる。その神々が人の崇信を目覚めしめそのより高き憧憬を強めることは出来た、しかし内心彼らはそれらは單なる比喩であることを知つてゐた。人間に依つて彫られた美しきイメヂは神ではなく單に神を信ずるために助けとなるシンボルであつた。同様神自身は表象されたときは實在ではなく、實在を觀念するための助けとなる一つのシンボルであるに外ならなかつた。それが彼等の前に置かれた課題であつた。兎に角、彼等は知識と矛盾する信條は一つも發しなかつたし、人間を以てその内なる光に對立せしめるやうな命條は何も出さなかつた。」

我々の場合に於ても、プラトンに於て前述の取扱ひはプラトンIIプロタゴラス的といふならばプラトンIIソクラテスの面の取扱ひをも、はらんでゐることを無視してはならない。寧ろこの實踐的なる面を重視せねばならぬ。即ち「プロタゴラス」の最後の節、ソクラテスが「私にはあの詩話ミユトスに於てもエビメテウスよりはプロメテウスの方が遙かに氣に入りました、そこで彼と同志になつて私も亦、前以て考慮をめぐらし、私自身の全生涯のために其等一切の問題を論攻しようと計畫してゐます云々」(菊地氏譯)

更に「バイドン」の宇宙についての「眞に美しいミユトス」と自讃するソクラテスのミユトスの後に云ふ言葉、「さて今私の談したことは事實であると強く主張することは理性ある者にとつては、ふさはしくあるまい。しかし若し魂が明かに不死であるとした場合に、我々の魂や其の住居に關して、其の様なこと或は其に似たことがあると言ふのは如何にもふさはしいことである。と共に、又さうであると敢て信ずる價值もあると私は思ふ、この敢ては善いことであるから。そして我々は自分自身を呪詛するためにさういふことを用ひなければならない。私も亦そのために長い間このミユトスを詳しく談した次第である。」(菊地氏譯)

宗教に於ける普遍主義と個人主義との發生、儀禮と神話とよりの團體的行事の成立、劇、詩、藝術へのパトスの展開、概念、哲學へのロゴスの展開の諸問題がこゝに浮上る。プロメテウスに於けるこの展開の把握は先の課題歴史面の把握と同時に行はれるであらう。

二

かくして、この神話の構造を吟味することにより、宗教的、道徳的、形而上學的、政治的、一言にして云へば、神話的二元が明とされ、それが社會的論理的にまで鏡く對立させて握み出される。しかしその地盤は單一の種の上であり、その歴史的面は單にモイライ運命であり、遂に空間的なることを脱し得なかつた。我々はこの神話の過程に歴史的なものを見ようとしても困難であり、基礎を欠く。我々は前史より區別さるる所謂、歴史以後について實證的にみることを要する。それが却つて前史の假説の歴史的なるものを追求するのに寄與するところ多いであらう。

實證主義的文獻學は先づ現在、この日本に於ける私の立場にとつて限定されてゐる。私の目からしたペースペクチフは科學的反省を加へる必要がある。歴史的社會的にみるといふことは行爲的にみることであらうが、主觀的、希望的、嘲笑的、プロパガンダ的にみることを意味しない。自己の行動のための正確なる情勢觀察を求める。解釋學が要求される。公正テミスの目で見るといふことは歴史の目でみることである。ホライとデケとはテミスの娘達である。歴史的解釋學が一應要求される。先づその名を標榜するディルタイに就いてみれば、かの對立は、「生の謎」として次の如く云はれてゐる。(シモンツその他の文獻學者のプロメテウス問題の浮き上らせ方参照。)

生を全體として把握しようとするとき、轉變する諸々の生活經驗から示される生の面貌は、生命性と同時に法則、理性と恣意といふ風に矛盾に充ち、恒に新しき相を現し、従つて個々の場合には、或ひは明かであるにしても、全體としては全く謎である。精神は諸々の生關係とそれに基づく諸經驗とを全體に總括しようとするが、それを果し得ない。生殖、誕生、成長及び死が一切の不可解の中心點である。生けるものは死について知つてゐるが、しかし死を理解することは出来ぬ。死者を初めて見たときから死は人生にとつて理解すべからざるものである。さうして吾々が世界に對して何か他のもの、異様なもの、また恐しきものに對する如き態度をとるのは何よりも先づ此處に基いてゐる。従つて死といふ事實の中には、この事實を説明する想像的觀念を強要するものがある。死者の

信仰、祖先の崇拜、死者の祭祀が宗教的信仰や形而上學の基礎觀念を生む。永遠の闘争、他の生物によつてある生物が絶えず減ばされること、自然を支配してゐるものの殘忍さ、これらのことを人が社會や自然に於て經驗するにつれ、生の異様さは増大する。生活經驗に於て次第に強く意識されてくるが、決して解かれることのない様々の奇異な矛盾が現れてくる。即ち、一般に諸行無常なることと確乎たるものに向ふ吾々の意志、自然の力と吾々の意志の自立性、時間空間内のあらゆる事物の被限定性と如何なる限界をも超越する吾々の能力、がこれである。埃及やバビロンの僧侶達も今日のキリスト教の牧師の説教と同じ様に、ヘラクレイトスやヘーゲルやアイスキュロスのプロメテウスもゲーテのファウストと同じ様にこの謎の解決に従事したのである。(山本氏譯)

従つて世界觀の問題とされ、その型が求められる。これは生の謎をとくもので、神話にて構成されし謎の解決は、社會的論理的の解決そのものと云はれぬ。今しかし我々の求めてゐるのは、正確なる情勢觀察であつた。解くための觀察である。型の出來上つた結果よりみれば、我々の最初の歴史的要求は充されぬ。併しその型を求めてゆく研究過程に於て會得することは可能であらう。その可能はいかなる場合であるか。その場合を如何に科學的に把むか。天才の洞察、勤の問題に移すか。

勿論、アイスキュロス、ゲーテ、シェラー、バイロン、シュピットラー、ジイド等のプロメテウス作品を巡禮して行つたのは、内からの愛であつたし今後も然ることであらう。併し内から一つ一つの作品に惹れつつ次ぎ次ぎに移つて行つたものが、いつしか集積すると、自己洞察と共に、外にこれらのものの組織化が研究的に求められる。或る時は發見の悦びの方が大きくて、その作品内容を読んで感銘が少いのもある。(ヴォルテール・ギーラント・ヘルデル等)追體驗も全體に裏付けられなくとも印象記に止りこゝでも今の自分の立場の限界がある。かかるところで、象徴主義、神話主義を取つたならば、公正は失はれるであらう。純粹は消えるであらう。歴史的な全體觀を要求する。歴史的社會的、即ち

行爲的に未だはつきり把握出來ぬのは、歴史面の知識不足の意識からである。單に意欲と個人良心的正義感と或は既成の知識公式とへ頼らず批判するとき再び我が肉眼を以つてする正確な知識が渴望される。我に確信を興へるもの、我を欺むかぬものこそ客觀的知識を要求し得よう。而も實驗の試練を受けねばならぬことは云ふまでもない。しからば觀察のために自己を働かして或者は倒し或るものは除いたりして、觀察に都合よくしつゝ突入すべきであるか。しかし今日最早地圖を全然持たぬ原始的な戦はない。テイタノマキアはプロメテウスの策略ある方が勝つのである。しからばそれは洞ヶ峠の日寄見ではないか。或は種への反逆、二心ではないか。プロメテウスはテイタノマキアに一つの終りと解釋を興へる決定者であり、公正と勝利とは彼の味方する側のみ必然にあるといふこと丈は明かである。

テイタノマキアに於ては過去の怪物は總てその鎖を解き幽閉を破つて深淵より戰場へと登場し、總ての神々の閱歴と未來の地位とはこの戦で決する。歴史を現在に於ける旗印に依つて把み得る所以である。

型より象徴、象徴を更に旗印として把ふべきである。それは動的であり刻々位地と姿とを變へる。忽ち現れ忽ち消え、結合し分離し衝突する戰場にあつては、一個人にとつて、その立つ位地風物砂塵雲煙等により、ピースペクテフが限定され、感性的、藝術的にのみ見ることは甚だ危険である。これを是正すべきものとして我々のもつものは先に到達した空間平面的ながらかの社會論理的構造、種、種の分裂、類と個、テイタノマキア、オリュンポス覇權後の交渉和解反省等であるが、これを歴史の上で具體的に、公式としてでなく假説として用ひて明かにするのが課題となる。この場合の抽象偏向は未だそれが決斷の前提たる點に存する。それは過去の歴史にあらはれた制作作品をとらへ

る外なくその連關展開發展を了解的に、知的に洞察把握することであり、従つて行爲の象徴、旗印が、旗印の比喩面よりしか把へられぬことを自覺することに依つて始めて生かさるゝものである。

我々は多數のプロメテウスの比喩を表現の立場に於てその成立を了解し得るがその相互に價値を争ふ旗印として把へ得ない。文藝史的展開は割愛せざるを得なかつたのでそこに用ひられし比喩の對象の一端を擧げると、先づ人間、(人間の位地、人間性格の原像、人倫性、人間自我)、自由、自由意志、對神者、意志、精神、悟性、先見、先驗、豫言者、巨人、超人、半神、テイタニスムス。ヒュプリス反抗、惡魔、火、苦惱、忍苦、人間の勝利、勇氣、解脱、救済、自己犠牲、精神的文化的勇士、ヒューマニスムス、人道主義、民主主義、革命、革新、道德性、惡無限、憂鬱症、沈黙、悲劇の原型、人類愛、文化、技術、學、詩人藝術家、天才、造形美術の祖、創造者、立法者、他の神話人との同一視より、火神ロキ、ルシフェル、サタン、キリスト、ヨブ、カイン、アハスヴェル、フアウスト、モーゼ、アダムノア、マンフレッド、ニオベ、ドンキホーテ、歴史的人物、ダンテ、ミケロアンデロ、ルネサンス男、ブルーノ、ケーザル、アレキサンダー、シャルル十二世、ナポレオン、ゲーテ、ニイチエ、カンブロンヌ、シエクスピア、カント、ストア主義、浪漫派の有機體説(ウアルツェル)。これを取扱ひし主なる人々、希臘以後、ペーコン・カルデロン、シヤフツベリー、啓蒙ヘルデル、ゲーテ、シエリー、バイロン、浪漫派、シエリング・シユピットラー、コーヘン、ニイチエ等、崇敬と輕蔑へシオドスに於てそれは既に *Προμηθεὺς ἀγκυλομήτης* と *εὖς τῆς Τάρταρο* との對立をはらむ。キリスト教よりの攻撃、アリアン族の悲劇性への證券、山師と高みより來る野蠻人等、この根本的な底へまで徹底せしめると、人間性格の二典型、活動的行動的有爲的と瞑想的觀照的無爲的、經驗的性格と叙智的性格、先見と後慮、プロメテウスとエピメテウスに歸着せしめられる。(ゲーテの「プロメテウス」象徴及「パンドラ」。参照)

過ぎ了つた過去の了解は、汝の表現をうながす、エピメテウスを離れてプロメテウスの立場に立たなくてはならぬ。かの觀察は遂に知的に止り、諸國民、民族、階級集團、職業、生活層の憧憬意欲、認識、感情の各時代に於ける表現としてみた。それらは勿論各々その場合に於て創造的人格の自由が絶對を賭け、その意味で象徴であり旗印ともなり得たが、これを過去の歴史的に知的觀察として見るときその旗印は比喩として把へられた。旗印として把まんだためにプロメテウスの立場をとりつつ、觀照文では、即ち未來と若さと行爲とを除外しては、到底象徴の一機能、旗印として把み得ないのは當然である。プロメテウスが一句たりとも取扱はれてゐるところでは、それは象徴の役目をそのとき果した。故にただプロメテウスの名をそのままその作品の肉をつけてえぐり出してでも決して、死物ではない。しかし私の行爲が入らぬ以上、主體化が行はれぬ以上、それはあくまで比喩に終る。ここに作品の鑑賞味到の不充分を指摘されようともそれは主體化の方へ迫らしむ基礎の不足の指摘としては理由をもつ、核心は私自身が、これを象徴として把へなければならぬことである。

神話が比喩的意義を可能性として含んでゐる故に、神話の意義の無限性ある故に、解釋の放恣、氣儘勝手にプロメテウスを作成してよいか。この場合、行爲と自由との嚴肅性とを考へず、單に空想の可能の詩作を營むとき、それも象徴と云へ得るか。これへの答は先づ現實的にそれを持ち來れといふのみである。しかしこれは表現の立場で既に不能である。そこには表現の必然性がなければならぬ。或は直接性がなければならぬ。沉んや象徴の立場にあつては、そこでは嚴肅に主觀性の絶滅、客觀性と全體への要求の貫徹が要求される。この過去の歴史的なるものを貫いてその普遍的根基となるもの即ちその原型を汝がここに主張するものでなければならぬ。

我々は先に、プロメテウスなる神話を社會的論理的構造に於て把み、一般に依つて之を直觀的にまで齎らすことを試み、類個種を通して圖式化した。かく次に一般的なるものとしてプロメテウスが歴史的特殊に於ていかに比喩として、直觀的に表現され來つたかを見た。而して今、象徴的原型を求めてゐる。我々はシエリングの神話一般の構成原理の構造を想起せざるを得ない。神話一般を自然若しくは宇宙の圖式論として概念することも不可能、史的解釋——實在的或は哲學說——の比喩も後世の思ひ付きであり神話自體は比喩的でもなく圖式的でもなく、寧ろ兩者の絶對的同一、無差別即象徴であるとする。詩的絶對性にみる。圖式的とは、一般が特殊を意味し、或は特殊が一般によつて直觀さるる表現。比喩的とは、特殊が一般を意味し、或は一般が特殊によつて直觀さるる表現。かかる兩者の綜合、一般は特殊を意味せず、特殊も一般を意味せず、寧ろ一般と特殊とが絶對的に同一であるとき、象徴的。三つの表現方法は構想力によつてのみ可能であり、その諸形式であるが、象徴はあくまで絶對的形式である。同一無差別による表現、一般は全く特殊であり特殊は同時に一般であつて然も毫もそれを意味せぬ。神話の理念や概念は現實としなければ破壊される。かかる本質の最高魔力はそれがあらゆる關係を離れそれ自らに於て絶對的に存在しつゝ同時に常にその意義を發揮するところにある。

我々はここでも藝術哲學のエピメテウス面を捨象せねばならない。絶對的同一無差別は行爲とされねばならぬ。シエリングはその凡ゆる行爲を、一般が特殊によつて直觀さるるものとして比喩的とし、思惟を圖式化作用、藝術を象徴的とするが、行爲のみが象徴的であり、象徴によらざれば行爲は概念されぬ。

かくて、プロメテウス神話を象徴にて把へる。それは、かの社會の圖式化でもなければ歴史作品の比喩化でもない兩者の綜合を行爲することである。かくして行爲としての自己の立論に達する。——未完——